

2021年5月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、ユーラシア大陸北部で波列パターンが明瞭で、ウラル山脈付近で顕著な正偏差となった。また、ヨーロッパ～アフリカ北東部でも波列パターンが見られ、地中海東部で顕著な正偏差となった。200hPa 風速をみると、中国～日本の東海上では、亜熱帯ジェット気流が平年に比べて北寄り flowed。ユーラシア大陸北部で寒帯前線ジェット気流の蛇行が顕著だった。海面気圧をみると、平年に比べて、日本の南海上で太平洋高気圧の西への張り出しが強かった一方で、中国北東部～日本付近で負偏差となった。また、北米西岸沖、北米の広い範囲で顕著な正偏差が見られた。850hPa 気温をみると、中国南東部～日本の南海上等で顕著な高温偏差、アイスランド付近～ヨーロッパ西部等で顕著な低温偏差となった。

対流活動は、平年と比べて、北インド洋熱帯域の西部～インド北部、太平洋西部の北緯5度帯で活発、インドシナ半島～フィリピンの北東海上等で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、アフリカ～太平洋西部を東進した。対流圏上層では、インド洋熱帯域の西部～中部で南北半球対の高気圧性循環偏差、太平洋熱帯域の中部で南北半球対の低気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、アラビア海付近で低気圧性循環偏差、南シナ海北部～北太平洋の北緯30度帯で高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、赤道域

では、太平洋東部～大西洋中部、アフリカで正偏差、インド洋～太平洋中部で負偏差となった。南方振動指数は+0.8だった。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.21℃（速報値）であった。4月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.72℃/100年（速報値）である。

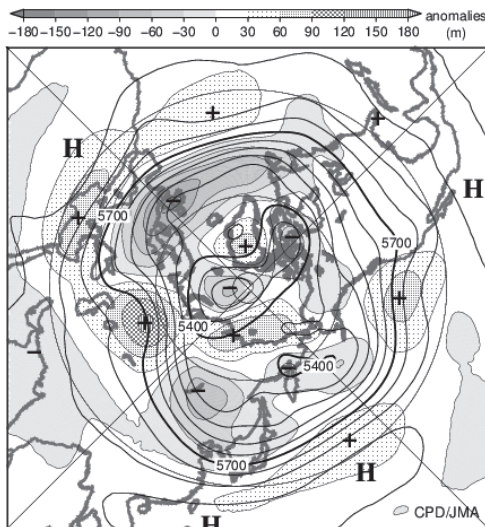
- 主な異常天候発生地域は次のとおり。
- 東アジア南部～東南アジア北部、中国南部～インド東部、中央アジア及びその周辺、中東北西部～北アフリカ中部等で異常高温、東シベリア西部～中央シベリア南東部、ヨーロッパ中部～北西部で異常低温となった。
 - 西日本～中国東部、中国南西部～インド南西部、ロシア西部～ヨーロッパ北西部、米国南部～メキシコ中部で異常多雨、カナダ南東部～米国中西部等で異常少雨となった。

（気象庁 大気海洋部 気候情報課）

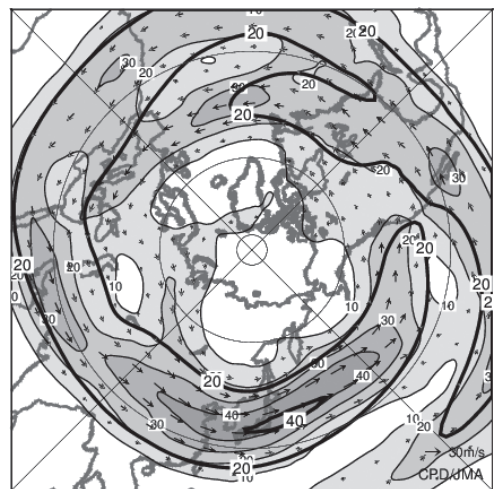
※ 今号以降、特に断りのない限り、1991～2020年平均値を気候平均値として記述しています。

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

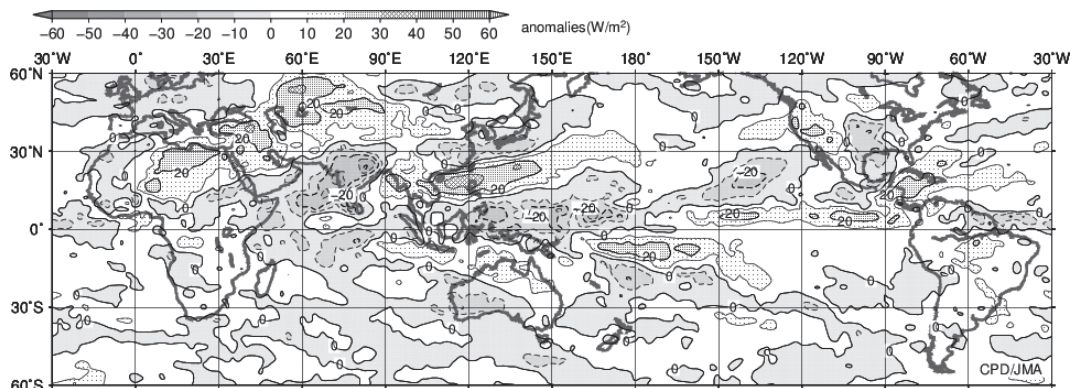
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>



2021年5月の北半球月平均500hPa 高度及び
 平年偏差
 等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は
 1991～2020年の平均値。

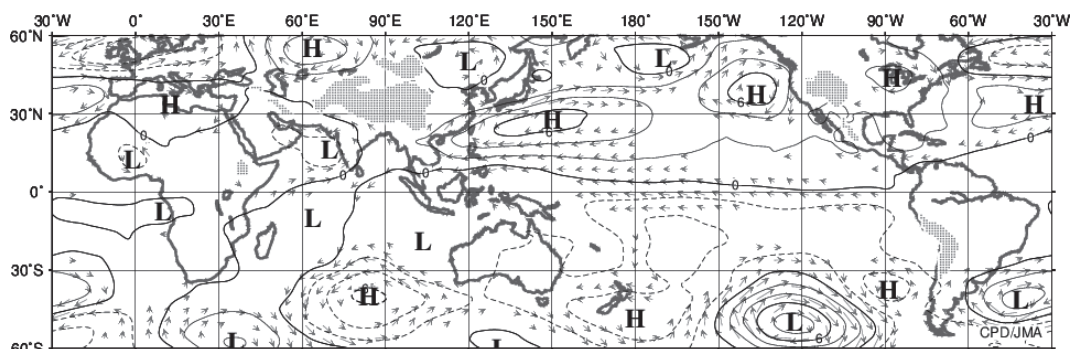


2021年5月の北半球月平均200hPa 風速及び
 風ベクトル
 等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等値
 線間隔は20m/s。平年値は1991～2020年の平均値。



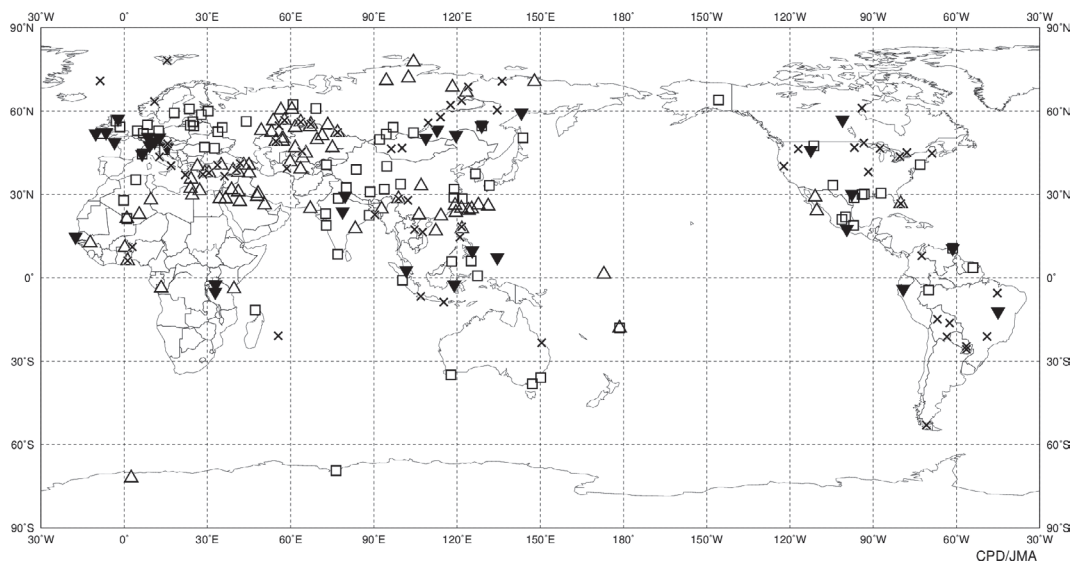
2021年5月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁 (NOAA) より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1991~2020年の平均値。



2021年5月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1991~2020年の平均値。



2021年5月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨

異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。